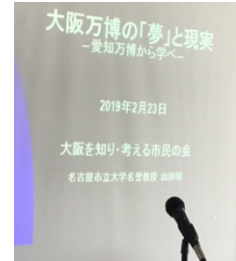


## 大阪万博の「夢」と現実



写真のように、2月23日に講演を行った。大阪「カジノ万博」について、たっぷりと話すことができた。とりあえず報告要旨を掲載。

昨年11月23日深夜、2025年国際博覧会（万博）の日本・大阪への誘致が決まった。それから3ヶ月。一時のお祝いムードも冷めて、万博があまり話題にならなくなった。万博に代わり、大阪市をなくす「大阪都」構想なるものが、マスコミを賑わしている。大阪維新にとって、万博よりも都構想のほうが大切なのだろう。あらためて万博誘致の政治的な「意味」を問いたい。

1月末に「博覧会協会」が設立され、やっと本格的な作業が始まった。ここで万博の基本計画などを策定し、博覧会国際事務局（BIE）に登録申請して、その承認を受けなくてはならない。2025年大阪万博が決まったとはいえ、まだ「仮免許」の状態であり、開催までの前途は多難である。

今日、皆さんに話したいのは、大阪万博に立ちはだかる厚い壁である。万博について「夢」は多く語られるが、開催に向けての課題は、無視ないし先送りされがちである。大阪万博をめぐる現実をシビアに直視することが大切だ。今からでも遅くはない。長年にわたり2005年の愛知万博をウォッチしてきた一人として、政府や大阪府・市、そして経済界などに「大阪万博は、愛知の経験に学べ」と言いたい。

とりわけ万博会場をめぐる、大阪万博は愛知万博と同じような問題に直面している。愛知万博は会場を二転三転させ、なんとか開催にこぎつけた。当初は瀬戸市の「海上の森」という里山が会場予定地だった。万博跡地には「新住事業」というニュータウン開発が計画された。緑豊かな里山を破壊する万博に批判が集まり、地元と国内外の環境保護団体を突き動かし、BIEも跡地開発などに警告を出すことになる。愛知万博は「新住事業」と「心中」する寸前まで追い込まれた。それでBIEへの登録を延期して、メイン会場を「海上の森」から「愛知青少年公園」に変更した。

大阪万博の会場予定地は、大阪湾の埋立中の人工島「夢洲」である。ここは環境への影響だけでなく、防災・安全面で大きな問題を抱えている、それとIRという名のカジノ＝賭博場と隣り合わせ、カジノ頼みの万博である。万博跡地は、カジノなどに使う予定のようだ。それに基盤整備やアクセスなど、巨額の財政負担を強いられる。万博会場を「夢洲」に固執すると、愛知のように万博に国内外、BIEから待ったがかかるのではないか。それには「仮免許」の段階で、大阪万博の会場予定地「夢洲」のリスク、「カジノ万博」の正体をどれだけ広められるかである。

二度目の大阪万博が「夢の洲」ならぬ「夢の万博」にならないように、夢洲を会場にする「カジノ万博」に警鐘を鳴らしたい。

(2019年2月24日)